



功利主義へのリアクション(2)

—経済理論との交錯—*

中 井 大 介

要旨 経済学は功利主義と密接な関係を持つと見なされる一方で、経済学者自身は必ずしも功利主義への支持を積極的に表明してきたわけではないことも事実である。本論では、「功利主義」、「功利主義者／功利主義的」の用例を軸としながら、経済学者たちの功利主義に対するリアクションに注目する。第2節では、功利主義を積極的に掲げながら効用理論の形成などに寄与した、ジェヴォンズ、シジウィック、エッジワースらの言説をとりあげる。第3節では、功利主義を掲げることに慎重であった、マーシャル、ピグー、ケインズの議論に照準を合わせる。経済理論との交錯を通じた功利主義の概念形成をたどることで、功利主義の特徴を明確に浮かび上がらせることにしたい。

キーワード 功利主義, 概念史, 経済思想

原稿受理日 2023年4月20日

Abstract While economics is considered to be closely related to utilitarianism, economists themselves have not always expressed their support for utilitarianism. Here we explore the usage of "utilitarianism / utilitarian" and examine economists' reactions to utilitarianism. In section 2, we examine the discourse of Jevons, Sidgwick, and Edgeworth, who advocated utilitarianism while contributing to the formation of utility theory. In section 3, we focus on Marshall, Pigou, and Keynes, who were cautious about advocating utilitarianism. By tracing the development of the concept of utilitarianism through its intersection with economic theory, we clarify the characteristics of utilitarianism.

Key words utilitarianism, conceptual history, economic thought

* 本研究は、科研費17K03647および23K01328の助成を受けたものである。

1. はじめに

古代のエピクロス (Epicurus: 341-270 B.C.E) の快楽主義が起源ともされる「功利主義 (utilitarianism)」は、結果として得られる快苦や効用を重視するロック (John Locke: 1632-1704) やヒューム (David Hume: 1711-1776) の議論を経ながら、18世紀末にベンサム (Jeremy Bentham: 1748-1832) の手によって本格的に確立された思想である。ベンサムは「最大多数の最大幸福 (the greatest happiness of the greatest numbers)」や「効用原理 (the principle of utility)」などのフレーズを援用しながら、全体の幸福をいや増すか否か——あるいは快楽の増加や苦痛の減少をもたらすか否か——によって、あらゆる行為が正しいのか間違っているのかを判断すべきであると唱えたのであった。また、ベンサムの功利主義を起点として様々な社会改革を唱える「哲学的急進派 (philosophic radicals)」の活動は、世間の耳目を集めることになった。

しかし、粗野で利己的な快楽主義と評されるなど、功利主義は多くの反発を引き起こすことにもなった。「功利主義」や「功利主義的／功利主義者 (utilitarian)」という言葉は、アカデミックな領域に留まらず一般用語としても浸透することになったが、実利重視の打算的で味気のない様子を揶揄する場合のように、ネガティブなニュアンスを纏うことが多いように見受けられる。たとえば、19世紀イギリスの作家ディケンズ (Charles Dickens: 1812-1870) の作品には、次のような描写がある。

しかし、何とまあ静かな通りだろうか！ 巡業バンドはいないのか？ 管楽器や弦楽器はないのか？ まったく何もない。パンチ [人形劇に登場する粗暴な道化] も、操り人形も、踊る犬も、ジャグラーも、手品師も、オーケストリオンも、あるいはバレルオルガンさえも、日中は何もないのか？ まったく何もない。いや、思い出した。1台のバレルオルガンと1匹の踊る猿だ——生まれつきの陽気さもすぐに色褪せてしまう、冴えない無様な功利主義学派の猿だ。それ以外では、クルクル回るケージのなかの白いネズミよりも生き生きとしたものはまったく何もない。

C. Dickens, *American Notes for General Circulation* (1842), Vol. I., p. 209.⁽¹⁾

(1) Dickens, Charles. 1842. *American Notes for General Circulation*. London: Chapman and Hall. 同作品には、次のような描写もある。「アメリカ文学が保護を受けるべきでない理由とは、まさしく貿易愛にある。‘我々は貿易に熱心に取り組むのだが、詩のことなど気に留めない人間なのだから。’ちなみに我々は、同胞の詩人たちを大いに誇りとするような素振りを見せている。けろ

同様に C. ブロンテ (Charlotte Brontë: 1816-1855) の作品にも、美的感覚に欠如した「功利主義者たち」の様子を次のように描写する場面がある。

功利主義者たちが彼 [真の詩人] について判断を下し、彼もその芸術も役立たずだと宣告する場合でさえも、彼は激しい嘲りを伴う判決——彼は慰められるべきどころか叱責されるべきだと訴える、不吉なパリサイ人の、広範で、根深く、徹底的で、しかも無情な侮蔑を伴う判決——を耳にすることになる。

C. Brontë, *Shirley* (1849), Vol. I., pp. 65-66.⁽²⁾

功利主義に付き纏うこのようなネガティブなイメージや誤解を払拭するために、J. S. ミル (John Stuart Mill: 1806-1873) は『功利主義論』(1861) を著し、真の最大幸福を実現するためには、むしろ高尚な快楽を追及したり利他的な人間性を陶冶したりすることが肝要であると唱えることで、功利主義の修正と擁護を試みたのであった。とはいえ、ミルによる軌道修正は、快楽の質や種類の差異を敢えて問わずに、結果として得られる快楽の量だけを考慮すべきだと訴えるベンサム流の功利主義からの逸脱と見なされることにもなった。

19世紀に活発に展開された功利主義への賛否両論を睨みながら、20世紀初頭に倫理学者ムーア (George Edward Moore: 1873-1958) は、あらゆる物事の価値をそこから導き出される快楽の大小に還元して見極めようとする功利主義の考え方に一定の妥当性があることを認めながらも、それ自体が目的として善であるものが存在するという事実を無視しているとして、功利主義に鋭い疑義を呈した⁽³⁾。ムーアによる総括や批評は、ベンサム流の功利主義の抱える問題点を乗り越えるべく、哲学や倫理学の領域における多種多様な功利主義論——行為功利主義と規則功利主義の峻別、選好功利主義、間接功利主義など——の展開を誘うことになる。他方において功利主義は、法学や経済学といったいわゆる社会科学の領域にも大きな影響を与えることにもなる。そもそもベンサム自身が、功利主義や効用原理は、個人の行為の是非だけでなく、政府の行為の是非をも判定する原理であると強調し、功利主義に基づく法学体系の構築を目指したからでもある。

↘れども、貿易という厳格な功利主義的愉しみを前にして、健康的な娯楽、愉快なレクリエーション手段、さらに健全な想像は、すべて消え去ってしまうに違いない」(*Ibid.*, Vol. II., p. 293)。

(2) Bell, Currer. 1849. *Shirley*. London: Smith, Elder and Co.

(3) 18世紀末のベンサムの手による功利主義の本格的成立から20世紀初頭のムーアによる批評については、拙稿「功利主義へのリアクション(1): その起源と反発」(2021)を参照。

とりわけ経済学は功利主義と密接な関係を持つと見なされようになるのだが、経済学者自身が必ずしも功利主義への支持を積極的に表明してきたわけではないことも事実である。そこで本論では、「功利主義」や「功利主義者／功利主義的」という言葉の用例を参照しながら、経済学者たちによる功利主義へのリアクションに注目することにしたい。まず第2節では、功利主義を積極的に掲げながら効用理論の形成などに寄与することになった、ジェヴォンズ、シジウィック、エッジワースの言説をとりあげる。さらに第3節では、むしろ功利主義を掲げることに慎重であった、もしくは功利主義に対して批判的でさえあった、マーシャル、ピグー、ケインズの議論に照準を合わせる。このような経済理論の歴史的展開との交錯を通じた功利主義の概念形成をたどることで、功利主義の特徴をより明確に浮かび上がらせることにしたい。

2. 効用理論の形成

19世紀半ばのディケンズやブロンテの描写と同じように、19世紀後半以降も功利主義や功利主義者という言葉はネガティブな意味合いを纏い続けることになる。機能や実利を重視する思想としてポジティブな意味合いが込められる場合もあるとはいえ、やはり情緒や趣のない性向を揶揄するネガティブなレッテルとして用いられる方が多いように見受けられるからである。たとえば、イギリスの劇作家バーナード・ショウ（George Bernard Shaw: 1856-1950）の作中には、次のような描写がある。

やがて彼女 [アリス] は、すべてのものに多少とも装飾が施されているのだけれども、純粋な装飾品の類が部屋のなかに一切ないことに気付いた。室内の様子からして、ミス・カルーが功利主義者であることは明らかであった。非常に立派な暖炉があるけれども、炉棚の上には何も置かれていなかった。そこでアリスは、青い布カバーがしてあり、房飾りと真鍮の釘で囲われており、さらに豪華な額縁に収められた写真のたくさんある自分の寝室よりも、そこは趣の面で見劣りしていると考えてみたくなった。

G. B. Shaw, *Cashel Byron's Profession* (1886), p. 30.⁽⁴⁾

経済学者ケインズと親交のあったヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf: 1882-1941）

(4) Shaw, George Bernard. 1886. *Cashel Byron's Profession*. London: The Modern Press.

の作中にも、次のような一節がある。

そのような [イギリスの] 家には、間違いなくシェークスピアの本が1冊ある。その他にも、『失樂園』やジョージ・ハーバートの分厚くない本などがあるだろう。少し奇妙に思われるかもしれないが、[ブラウンの]『荒唐世説』や『医師の信仰』もあるかもしれない。トーマス・ブラウン卿の本は、何らかの理由で書斎の一番下の棚から発見されるのであり、その他の点については、まったく平凡で功利主義的である。

V. Woolf, 'Reading' (1919)⁽⁵⁾

ところで功利主義は、経済学と密接な結びつきをもつ思想と見なされる傾向がある。そもそも社会全体の豊かさや経済成長の問題を扱う経済学のテーマは、個々人の幸福を足し合わせた「一般幸福」の増大を望ましいと唱える功利主義の考え方とうまく符号するようにも見える。さらに、「効用最大化」を合理的な経済行動と想定するミクロ経済理論は、「効用原理」の上に打ち立てられていることも事実である。また、功利主義の創始者と目されるベンサム自身、功利主義を究極原理に据える総合的な立法体系を構築する試みの一環として、経済学研究に取り組んだ点も注目に値する。ベンサムは「最大多数の最大幸福」を明示的に掲げながら、富から得られる幸福に対象を絞りつつ、政府のなすべき経済的役割をもれなく洗い出そうと試みた。このようにして、スミス (Adam Smith: 1723-1790) の『国富論』(1776) で十分に扱われなかった政府の経済的役割を補完し網羅することを目論むベンサムの経済学は、結局のところ未完のまま終わることになった。とはいえ、彼の定式化した功利主義の考え方は、ジェヴォンズらに大きな影響を与えながら、19世紀後半の「限界革命 (marginal revolution)」を通じて効用分析の発展を導いていくことになるのである。

その一方において、19世紀半ば以降、「経済学者」と「功利主義者」はしばしば一括りにされて、同様の好ましくない考え方の持ち主として糾弾されるようになる。保護主義を拒絶しながら自由主義や自由貿易を訴える経済学者たちを非難する場合などに、次のように「功利主義者」というレッテルが経済学者に貼られるようになるのである。

彼らはわれわれのことを、経済学者ども——非情な功利主義者ども——と呼ぶのだ。

(5) Virginia, Woolf. 1950. *The Captain's Death Bed and Other Essays*. London: The Hogarth Press. p. 157.

よかろう、経済学者どもは、最も慈善に熱心なのだ。自由貿易主義者どもは、貧者に対して最も寛大なのだ。さすれば人々が貧しい生活を送ることになってしまうのだと、もしも反対論者たちがお考えであるのならば、私は彼らにお願いしたい。人々が飢えることがなくなることを保障せよと。彼らもたらすと唱える施しによって人々が救済されることを保障せよと。

‘The Metropolis – Mortality in the Metropolis’ (1844)⁽⁶⁾

19世紀半ばの自由貿易の是非をめぐる論争の場面のみならず、経済学者と功利主義者を同類と見なして揶揄する論調は、さらに20世紀以降も頻繁に繰り返されることになる。

このような近代の巨人たちは、合理的な費用で建築されている。この事実のために、それらは中世や古代の建築が明らかに備えた堅実性を欠いているのである。古典様式を学ぶ学生から見れば、それらは建築学上の不誠実さの所産なのである。彼の訓練された目には、それらは欺瞞として映るのである。…彼はアートの第一原理が誠実さにあると感じており、このような功利主義者や経済学者の産み出すものに反感を抱くのである。

M. M. Sloan, ‘The High Building’ (1900)⁽⁷⁾

このような批評に対して、それでは経済学者自身はどのような反応を示したのだろうか。そこで、「功利主義」や「功利主義的／功利主義者」という言葉の用例を参照しながら、経済学の発展に大きく寄与したイギリスの主流派の経済学者たちによる功利主義へのリアクションを概観していくことにしたい。まず、ベンサム、ジェームズ・ミル (James Mill: 1773-1836)、ジョン・スチュアート・ミルらは、功利主義を積極的に唱道する哲学者たちであると同時に、経済学の発展を主導した重要な経済学者たちでもあった⁽⁸⁾。さらに19世紀後半において、ジェヴォンズ、シジウィック、エッジワースは、以下で見ていくように、功利主義への支持を積極的に表明しながら、経済理論の展開を導いていくことになる⁽⁹⁾。

(6) *The Economist*. Dec. 14, 1844, Vol. 2, Issue 68.

(7) *Science and Industry*. Vol. V. No. 8. September, 1900. p. 428.

(8) ベンサム、ジェームズ・ミル、マルサス、リカード、J.S. ミルら19世紀の功利主義者やその経済学との関係は、たとえば下記を参照。Stephen, Leslie. 1900. *The English Utilitarians*. 3 vols. London: Duckworth and Co.

(9) 経済理論と功利主義の関連は、たとえば下記も参照。松嶋敦茂 (2005年)『功利主義は生き残る』

数理的な効用分析を打ち立てることで「限界革命」を主導し、古典派経済学のアプローチにかわる新たな理論分析の形成に大きく寄与することになったジェヴォンズ (William Stanley Jevons: 1835-1882) は、彼の名著『経済学の理論』(1871)の冒頭において、次のように功利主義への支持を明確に表明している。

経済の目的とは、いわば最小限の苦痛という費用において快楽を購入することによって、幸福を最大化することである。…何が正しく、そして何が過ちなのかの基準として——人類の幸福への影響を掲げるところの——道徳をめぐる功利主義の理論を受け入れることを、私は全く躊躇しない。

W. S. Jevons, *Theory of Political Economy* (1871), p. 27.⁽¹⁰⁾

さらにジェヴォンズは、「ジェレミー・ベンサムは、功利主義理論を最も妥協なき態度で前面に打ち出した」⁽¹¹⁾と評するなど、快楽と苦痛に対するベンサムのアプローチを称揚しながら、経済学が対象とすべき快楽と苦痛は「最低ランクの諸感覚」⁽¹²⁾であることを強調する。したがって、ジェヴォンズの経済理論で援用されているのは、高尚な利他的感情を重視するミル流の理想主義的な功利主義ではなく、ベンサム流の快楽主義的で帰結主義的な功利主義なのである。しかもジェヴォンズは、ベンサムを絶賛するのは対照的に、ミルに対してはリカードと並んで経済学を混乱に陥れた人物という辛辣な評価を下すのである⁽¹³⁾。

市場の失敗に対する政府の経済的介入という処方箋を包括的に提示し、福祉国家のアイデアや厚生経済学の形成への橋渡しとなる経済論を展開したと評されるシジウィック (Henry Sidgwick: 1838-1900) は、最も重要な古典的功利主義者の一人と目されている。彼は『倫理学の諸方法』(1874)において、究極的な個人のなすべき行為とは何かという問題を客観的に明らかにしようと試みる。そこで、「教条的な直観主義 (Dogmatic Intuitionism)」を退ける一方で、「合理的な利己主義 (Rational Egoism)」(自分自身の幸福の最大化)と「功利主義の方法 (the method of Utilitarianism)」(社会全体の幸福の最大

↙ るか：経済倫理学の構築に向けて』勁草書房。

(10) Jevons, William Stanley. 1871. *Theory of Political Economy*. London: Macmillan.

(11) *Ibid.*, p. 28.

(12) *Ibid.*, p. 32.

(13) ミルの死後の1879年に出版された『経済学の理論』第2版の序文で、このような辛辣な批判が新たに付け加えられている。

化)が、いずれも正しい指針と見なされうると結論付けるのである⁽¹⁴⁾。これは両義的・折衷的な結論といえるものの、利己心の超克と利他的な人間性の発展に期待を寄せるミルの道徳観・人間観を強く牽制する主張でもある。このようにして、倫理の問題における利己主義と功利主義の相違を明確に打ち出したうえで、シジウィックは『経済学原理』(1883)において、政府のなすべき経済的役割を導くところの究極的基準として、次のように最大幸福という功利主義の基準を掲げるのである。

…分配への政府介入について、純粹に経済的（もしくは功利主義的）な視点から議論することを私は提案する。その際、産業の成果である生産と分配に基づく限りにおいて、個人主義や社会主義がどのくらい最大幸福を導くと期待されるだろうかについて考慮する。

H. Sidgwick, *Principles of Political Economy* (1883), p. 498.⁽¹⁵⁾

以上のシジウィック自身の言説のなかに、「経済的」と「功利主義的」を結び合わせる用例が存在している点は注目に値する。さらに、シジウィックは『政治学要論』(1891)において、経済問題をその重要な一部として含むところの、より包括的な政府のなすべき役割とは何かという問題を政治学の課題として追及する。その際、一般幸福が促されるか否かという「功利主義の観点 (utilitarian point of view/utilitarian grounds)」を「究極的基準」として、彼はいっそう明確に掲げるのである⁽¹⁶⁾。19世紀末の個人主義と社会主義をめぐる論争を背景として、功利主義の下で両者を調停する途を示すことが、彼の大きな狙いでもある。他方において、シジウィックは数理的アプローチを経済学に導入することに否定的であり、ジェヴォンズによる辛辣な批判からミルを擁護する。とはいえ、利他的な人間性の発展や社会主義の到来の可能性といったミルが経済学の範疇に含めたような、人間性の変革を含む将来的課題については、実践的な経済学の射程から除外すべきであるとシジウィックは主張する。

エッジワース (Francis Ysidro Edgeworth: 1845-1926) は、効用分析を通じて数理経済学の発展に大きく貢献した人物として評価されている。シジウィック同様にエッジワースは倫理の問題に鋭い関心を示しており、彼の主著であり経済理論の発展に大きく寄与す

(14) Sidgwick, Henry. 1874. *The Methods of Ethics*. London: Macmillan.

(15) Sidgwick, Henry. 1883. *Principles of Political Economy*. London: Macmillan.

(16) Sidgwick, Henry. 1891. *Elements of Politics*. London: Macmillan.

ることになる『数理精神科学』(1881)は、シジウィックの『倫理学の諸方法』への論評を主題に据える著作である。同著においてエッジワースは、利己主義(利己的快樂主義)と功利主義(普遍的快樂主義)を峻別するシジウィックの方針を評価しながら、次のように功利主義を個人のなすべき行為を導く最上位の原理に位置付ける。

ミルとシジウィックが首尾よく論じたように、‘正義’は何らかのより明確な原理によって指導されなければならない。正義という星は、慣習という拠りどころから解き放たれた人々にとって、確実な指針を導くものではない。それがより上位の天体たる功利主義から放たれた光を反映しているのでない限りは。

F. Y. Edgeworth, *Mathematical Psychics* (1881), p. 52⁽¹⁷⁾

他方でエッジワースは、「経済学の第一原理は、各主体が利己心のみにも動機づけられているということである」⁽¹⁸⁾とも主張する。利己心に従う市場での競争と契約者間の裁定を通じて、「最大可能な効用の総計」⁽¹⁹⁾として定義づけられる「功利主義地点(the utilitarian point)」が達せられる仕組みを数理的に解明していく際に、エッジワースは無差別曲線や契約曲線などの経済理論分析の中核を担うことになる重要なアイデアを編み出すのである。また、利己心に基づく活動に主眼をおく経済的観点ではなく、より包括的な人間理解を前提とすることが求められる政治的観点を持つことの必要性について言及しながら、現実の人々の間には快樂を享受する能力に差異があるとエッジワースは指摘する。そこで「最大多数の最大幸福」を実現するために、「万民同権型功利主義(isocratical Utilitarianism)」と「貴族制度型功利主義(aristocratical Utilitarianism)」という2つの方向性が存在すると論じながらも、「功利主義者は彼の目標地点を普遍的快樂主義から利己的快樂主義へと変えるべきであるということが導き出されるわけではない」⁽²⁰⁾とエッジワースは結ぶのである。

3. 経済理論と価値判断

(17) Edgeworth, Francis Ysidro. 1881. *Mathematical Psychics: An Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*. London: C. Kegan Paul and Co.

(18) *Ibid.*, p. 16.

(19) *Ibid.*, p. 56.

(20) *Ibid.*, p. 81.

とはいえ、ミクロ経済理論や厚生経済学の形成に寄与したイギリスの主流派の経済学者たちのすべてが、ジェヴォンズ、シジウィック、エッジワースのように、功利主義の基準を明示的に掲げたわけではなく、また功利主義を積極的に支持したわけでもない。弾力性や余剰分析などのアイデアを創出し、ミクロ経済理論の形成に決定的役割を果たしたマーシャル (Alfred Marshall: 1842-1924) は、経済学と功利主義を単純に結び付けてしまう傾向に対して、むしろ次のように警鐘を鳴らすのである。

経済学者たちは効用について分析し、最終効用や総効用などについて論じてきたのだから、そのような分析において、倫理の問題をめぐる功利主義の理論が必然的に受け入れられているのだ。このように早合点し、結論付けられてしまう場合がある。…[実際のところ] 今日の経済学者たちは、これらの [経済人による] 行動のインセンティブについて、低俗な快楽だけでなく、高次の活動の展開に向けられるあらゆる精神の向上も勘案している。

A. Marshall, Speech at the Meeting of the British Economic Association (1893)⁽²¹⁾

続けてマーシャルは、「偉大な経済学者たちのなかには、功利主義者たちが含まれていることは真実である。とはいえ、それは偶然であって、彼らの分析は功利主義の学説とまったく無関係である」と論じる⁽²²⁾。さらに、経済と倫理の問題を切り分ける必要性を説きながら、経済学の理論分析において功利主義の価値判断が前提とされているわけではないことを、マーシャルは次のように繰り返し強調するのである。

すべての人が、絶えず自らの快楽を勘定し、絶えず慎重に最大快楽と最高価格を追求する。近代の経済学者たちは、功利主義の教えに導かれてこのように仮定しているのだと捉えてしまう人がある。しかし、需要と供給の科学的分析の目的と趣旨について、一方にとってのインセンティブである効用と他方にとっての妨げである不効用について、これは完全に誤解してしまっている。というのも、例えていえば、経済学が扱うところの画家たちとは、気まぐれな衝動を備えた、あるがままの画家たちなのである。そして画家たちは、自分たちの喜びとならないのであれば、高額で肖像画を描く注文を受けるのを拒否してしまう場合もあるからである。それは、経済学が自然による収

(21) *The Economic Journal*, Vol. 3, Issue 11, September 1893, p. 388.

(22) *Ibid.*, p. 388.

稷の気まぐれを扱うのとまったく同様である。／だからこそ、経済学は功利主義的でもなければ、直観主義的でもないのである。そのような問題は、権威たる倫理学によって決定されるべきものとして委ねたのである。

A. Marshall, Speech at the Meeting of the British Economic Association (1893)⁽²³⁾

ここでマーシャルのねらいは、功利主義を糾弾したり拒絶したりすることよりも、むしろ倫理や価値判断といった問題を経済学に混入させてしまう危険性に警鐘を鳴らすことにある。とはいえ、個人のなすべき行為を導く究極的指針としても、あるいは政府のなすべき役割を導く究極的指針としても、快苦計算に基づく帰結主義的な功利主義の価値観を彼が進んで受け入れているわけではないことも事実である。たとえば、マーシャルは『経済学原理』(1890)において、ジェヴォンズやシジウィックとは対照的に、理想主義的なミルの思想に強い共感を示しながら、そこに進化論の科学的なアイデアを織り交ぜるかたちで、将来における利他的な人間性の発展と社会主義の可能性を展望しようと試みるからである。さらに同著の第3版(1895)において、シジウィックの功利主義を鋭く批判した理想主義の哲学者グリーン(Thomas Hill Green: 1836-1882)の議論を援用しながら、功利主義に対する次のような言説をマーシャルは付け加えるのである。

経済的用語の一般的な使用法のために、経済学者たちは快樂主義ないし功利主義の哲学体系に執着しているのだと、しばしば世間では信じ込まれている。… [しかしながら] 倫理的論争における一側面を取り上げることが、経済学の責務ではないことは明白である。

A. Marshall, *Principles of Economics*, 3rd edition (1895), pp. 77-78⁽²⁴⁾

価値判断の問題をめぐる倫理的考察と経済の問題を区別するかたちで、功利主義を経済学から切り離そうとしたマーシャルに対して、その教え子であるピグー(Arthur Cecil

(23) *Ibid.*, p. 389.

(24) Marshall, Alfred. 1895. *Principles of Economics*, 3rd edition. London: Macmillan. また、第5版(1907)の章立ての変更の際に、引用部分の内容に修正が施されている。マーシャルと功利主義の関連およびジェヴォンズの反応との相違については、例えば下記も参照。Black, R. D. Collison. 1990. 'Jevons, Marshall and the Utilitarian Tradition', *Scottish Journal of Political Economy*, Vol. 37(1), pp. 5-17. また、ベンサムからジェヴォンズ、そしてマーシャルへと至る効用概念の変遷については、下記を参照。Warke, Tom. 2000. 'Mathematical Fitness in the Evolution of the Utility Concept from Bentham to Jevons to Marshall', *Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 22(1), pp. 5-27.

Pigou: 1878-1959) は、一般に功利主義のアイデアに基づきながら厚生経済学を確立した経済学者と見なされている。ピグーは『厚生経済学』(1920)において、自由競争に基づく社会的生産の拡大を通じて「国民分配分 (national dividend)」(国民全体が受け取る財やサービス)が増大すれば、そこから国民全体が享受する「経済的厚生 (economic welfare)」も増大すると論じる。さらに彼は、国民分配分が一定のままであっても、政府の再分配政策などを通じて、経済的厚生を増大させることが可能であると主張する。シジウィックやエッジワースが功利主義の観点から提起した再分配や平等分配の積極的意義について、ピグーは「限界効用逓減の法則」をその根拠としながら体系的に考察することによって、厚生経済学を確立させることになる。

ただし、公共財の提供、再分配政策、あるいはピグー税の導入といった政府の経済的介入を導く基準としてピグーが直接掲げているのは、「功利主義」や「一般幸福」ではなく、「経済的厚生」であるという点に注意を要する。ピグーによると、政治家の参照する「実践的指標」である「厚生」は、「非常に幅広いもの」であり、そこに算入されるのは「物質的状态」ではなく「心の状態」であり、さらにその大小は類別されうるものであるという⁽²⁵⁾。そのような「厚生」をすべて合算した「総厚生 (total welfare)」ないし「社会的厚生 (social welfare)」のうち、「経済的厚生」とは「金銭的尺度との関連からもたらされうる一連の満足や不満足」⁽²⁶⁾からなる限定的な部分であるとピグーは論じる。

ピグーが功利主義への疑義や批判を展開している形跡は見当たらないし、それどころか彼はシジウィックの議論などを援用しながら、帰結主義的な功利主義のアプローチに則るかたちで「経済的厚生」を扱っていると見ることができる。とはいえ、ピグーがその前面に掲げているのは、「功利主義」や「最大多数の最大幸福」ではなく、20世紀初頭からいっそう頻繁に用いられるようになった「厚生／福祉 (welfare)」という言葉であることも事実である。ミルやシジウィックによる功利主義の修正や定式化といった試みも、功利主義という言葉の纏うネガティブな印象——もしくは世間一般の抱く功利主義への誤解や偏見——を払拭するには至らなかったということも、ピグーが積極的に「功利主義」を掲げなかった理由の一つであるのかもしれない⁽²⁷⁾。

(25) 『厚生経済学』は、『富と厚生』(1912)を修正し拡張させた著作であり、「厚生」の定義も『富と厚生』の論述に由来している。しかし、ムーアを参照しながら「厚生とは善と同じようなものである」とする一文などについては、『厚生経済学』では削除されている。Pigou, Arthur Cecile. 1912. *Wealth and Welfare*. London: Macmillan. p. 3.

(26) Pigou, Arthur Cecile. 1920. *The Economics of Welfare*. London: Macmillan. pp. 10-12, 23.

(27) 管見するかぎり、ピグーの『厚生経済学』において、「功利主義」や「功利主義的／功利主義者」の用例は見当たらない。また、『富と厚生』においては、次のような一箇所のみである。「そのような〔経済的調査全体としての〕目的は、もし科学によって我々が意味するところがそれ自体の

それでは、世界恐慌の最中に市場メカニズムに依拠する従来の経済学のアプローチを強く批判し、『雇用、利子および貨幣の一般理論』(1936)を通じて新たにマクロ経済学を切り拓くことになるケインズ(John Maynard Keynes: 1883-1946)の場合、功利主義に対してどのようなリアクションを示すのだろうか。「反功利主義」⁽²⁸⁾と目されることのあるケインズは、功利主義と結び付けるかたちで従来の経済学を糾弾し、非功利主義の経済論を展開するのだろうか。

マーシャルの死後、ケインズはその追悼文のなかで、経済学者たちが功利主義のアイデアに支配されてきた一方、マーシャル自身は必ずしもそうではなかったと論じる。

マーシャルは、彼の前の世代の経済学者たちを支配していた功利主義のアイデアから、決して明確に逸脱したわけではない。とはいえ…彼は、シジウィックをはるかに飛び越えて、ジェヴォンズの対極にまで到達した。…マーシャルにとって経済問題の解明とは、快樂計算の適用なのではなく、人間のより高度な諸能力の行使にとっての前提条件なのであった。

J. M. Keynes. 'Alfred Marshall' (1925), p. 9.⁽²⁹⁾

その翌年の「自由放任主義の終焉」(1926)では、ヒューム、ペイリー(William Paley: 1743-1805)、ベンサムらを起点として、功利主義と経済学が結び合わさりながら、自由放任主義が生み出された経緯について、ケインズは次のように論じる。「ペイリーとベンサムは、ヒュームとその前任者たちの手から功利主義の快樂主義を受容したが、それを社会的効用へと拡大させた」⁽³⁰⁾。さらに、一般幸福を直接目指す平等と博愛主義から「功利主義的社会主義」が導き出されるのだが、経済学者たちは「私的利益と公共善の神聖なる調

↘ ための知識の単眼的な調査であるとするならば、主として科学的ではない。それは、むしろ実践的かつ功利主義的であり、直接ないし間接に、社会生活の改善に向けた一助として役立てるべく、知識の諸部分をあらわにすることに主に関わる」(*Wealth and Welfare*, p. 4)。ピグーが「功利主義」や「功利主義者／功利主義的」という言葉を積極的に用いなかったとはいえ、必ずしも20世紀以降にそれらが世間一般で用いられることが少なくなったというわけではない。

(28) Carabelli, Anna & Cedrini, Mario. 2011. 'The Economic Problem of Happiness: Keynes on Happiness and Economics', *Forum for Social Economics*, Vol. 40(3). pp. 335-359. ケインズの立場は、次のようにも評されている。「ケインズの経済学は、彼の前任者たちの多くと異なり、さらに第二次世界大戦後に現れた主流の経済学と異なり、非功利主義的であった」(Backhouse, Roger E & Bateman, Bradley W. 2012. 'Keynes and the Welfare State', *History of Economic Thought and Policy*, Vol. 1. pp. 7-19).

(29) Keynes. John M. 'Alfred Marshall' (1925), in A.C. Pigou (ed.), *Memorials of Alfred Marshall*. London: Macmillan. pp. 1-65.

(30) Keynes, John M. 1926. *The End of Laissez-Faire*. London: Hogarth Press. p. 7.

和」に「優れた科学的根拠を与えた」⁽³¹⁾。そこに適者生存といった進化論のアイデアが組み入れられることで、自由競争を積極的に唱える経済思想が生まれ、個人主義と自由放任主義が同一視されるに至ったのだという。ケインズは、とりわけ1843年に出版されたベンサム『政治経済学便覧』を通じて、「自由放任の法則が…功利主義哲学の下に雇い入れられた」点に注目し、「マンチェスター学派やベンサム主義の功利主義者達の影響力」が一因となって、「自由放任こそが正統派経済学の実践的な結論である」という意識が、人々の間に植え付けられることになったと指摘する⁽³²⁾。

ここでケインズが批判の矛先を向けているのは、あくまで自由放任主義であって、スミスやベンサムはむしろ「偉大な権威たち」として、「人気取りや俗物ども」から区別されている点に注意を要する⁽³³⁾。また、『雇用、利子および貨幣の一般理論』においても、たしかにケインズはピグーを筆頭とした従来の経済学に「古典派理論」のレッテルを貼って厳しく糾弾するものの、そこでベンサムや功利主義を直接批判しているわけではない。したがって、ケインズは従来の経済学を批判するといった文脈で功利主義を拒絶するというよりも、むしろ功利主義や経済的基準を人生における究極的な価値と見なしてしまうような傾向を拒絶するのである。彼は「若き日の信条」(1938)において、真の文明としての愛や美や真理の価値に対する固い信条を吐露する一方で、「ベンサム主義の伝統 (Benthamite tradition)」に対する強烈な反感を次のように述懐し吐露するのである。

我々は快樂主義を窓から投げ捨て、非常に問題のあるムーアの計算を放棄したうえで、もっぱら現在の経験を通じて人生を享受するようになっていた。というのも、単なる哀れな義務ではない、それ自体として一つの目的である社会的活動が、さらに社会的活動のみならず人生をめぐる活動全般が、我々の理想から欠落していたからである。政治、成功、富は、経済的な動機や基準と同様、我々の哲学で重要ではなく、鳥のために寄付を募ったアッシジの聖フランチェスコほどの重要性もそこには認められなかった。だからこそ同世代のなかで我々が最初に、そしておそらく我々だけが、ベンサム主義の伝統から抜け出すことになったのである。少なくとも私自身に関する限り、実際に外側の世界が忘れ去られたり放棄されたりしたわけではなかった。けれども、情熱的な熟考と親交の人生が他のすべての目的を放逐するに相違ないと考えていた

(31) *Ibid.*, p. 10.

(32) *Ibid.*, p. 22.

(33) *Ibid.*, p. 17.

過ぎ去り日の我々の理想は、一体何であったのかを思い起こしてみたい。この追想を通じて、ベンサム主義の伝統から我々が抜け出すうえで、我々の理想が非常に大きな有利となった理由を説明しようというわけではない。けれども私が思うに、ベンサム主義の伝統こそが、近代文明の内部を蝕み、現在の道徳的退廃に責任を負う寄生虫なのである。かつて我々は、キリスト教徒たちを敵とみなした。彼らこそが、伝統、慣習、奇術の代弁者のように思われたからである。経済的基準の過大評価に基づくベンサム主義の計算こそが、世間の人々の理想の質を破壊していたというのが真実である。

J. M. Keynes, *My Early Beliefs* (1938), pp. 445-46.⁽³⁴⁾

4. お わ り に

ベンサムの手によって本格的に確立された功利主義は、その端緒から多くの反発を招くことになり、「功利主義」や「功利主義的／功利主義者」という言葉はネガティブなレッテルとして用いられるようにもなった。また、粗野な快楽主義との批判を経済学は功利主義と共に浴びせられる一方で、ジェヴォンズ、シジウィック、エッジワースらは、功利主義を積極的に掲げながら、効用分析を基盤とした経済理論の形成などを促すことになった。他方でマーシャルは、経済学は功利主義的ではないと断じながら、経済学に倫理的な価値判断の問題を混入させるべきでないと主張した。20世紀以降、経済学がいつそう専門化され、独立した学問分野と位置付けられるようになるなかで、経済学者が功利主義を標榜する機会は減少したようにも見える。とはいえ、ピグーは功利主義の考え方を前提としながら、再分配政策の有効性などを体系的に打ち出したと見られている。ケインズも示唆したように、自由主義とも社会主義とも結び付けられうる功利主義は、厚生経済学や福祉国家の形成を促すことになったと考えられるのである。本論で参照した作家たち、あるいはマーシャルやケインズなどの共有した世俗的な快楽主義という功利主義に対するネガティブな印象はその後も受け継がれていく一方で、20世紀後半にはロールズやセンらの議論を通じて、功利主義への批判の重心が、弱者の権利を無視したり分配問題を軽視したりするといった点へとシフトしていくことにもなるように見受けられる⁽³⁵⁾。

(34) Keynes, John M. 1938. 'My early beliefs', in D.E. Moggridge (ed.), *The Collected Writings of John Maynard Keynes* (1972), vol. X. London: Macmillan. pp. 433-50.

(35) このような功利主義観ないし功利主義批評のシフトについては、次論として扱う予定である。